

---

佐 幸 信 介\*

---

特集「ジャーナリズム－メディア－コミュニケーション・スタディーズのフロンティア」は、大井眞二教授の古稀を記念して企画された。大井教授は、1973年に日本大学法学部新聞学科を卒業後、大学院に進学し研究者としての第一歩を踏み出された。以来、ジャーナリズム研究とりわけジャーナリズム史研究の第一人者として歩まれてきた。その研究の射程の広さと洞察の深さは、ジャーナリズム領域のみならず、近接するメディア研究やコミュニケーション研究と交叉する。それは、今回寄稿していただいた20本の論文の多様性が端的に物語っている。

大井教授がジャーナリズム史研究に着手した1970年代から80年代のアメリカのジャーナリズム研究の知的環境は、著書『ジャーナリズム・スタディーズのフィールド』（学文社）でも指摘されているように、方法論論争が繰り広げられていた。とりわけシュドソン（Schudson, M）の *Discovering the News*（1978）や、米国マス・コミュニケーション学会のジャーナリズム史研究部会の研究誌 *Journalism History* の創刊号に掲載されたケアリーの論文「ジャーナリズム史の問題」との出会いが大きかったという。当時、社会史の方法論がジャーナリズム史研究に影響を与えていたのである。

大井教授は当時を振り返って次のように述べる。「1970年代は、社会史への着目と同時に、オルタナティブな歴史研究が次々と生み出されてきた時期でした。それは、端的に勝者の歴史でよいのかという反省であり、マイノリティの歴史を問い直すことでもありました。例えば、当時 *History* から *Herstory* へというシンボリックな言い方もなされ、事実、黒人の解放に中心的に貢献したのは女性です。そして、歴史研究者には女性、アングロ・アメリカンを含め、多様なエスニック・マイノリティの研究者が多いのです。こうした、アメリカのジャーナリズム史研究のダイナミズムを、1980年代にアメリカに留学するなかで皮膚感覚の次元で経験しました。歴史を社会史から問い直すことは、必然的に多元主義と交差させていくことです。」このように、大井教授は、しばしばジャーナリズムの多元性や文化的なファクターを強調するとき、その基底には社会史としてのジャーナリズム史という方法論的な視座が一貫しているのである。

そして、ジャーナリズム史を研究することは、あるひとつの社会の歴史を照射することである。そのことは大井教授が翻訳された、Emery, M., Emery, E., Roberts, N., *The Press and America, 9th*（『アメリカ報道史』大井眞二、武市英雄、水野剛也他訳、松柏社）のタイトルが端的に物語っている。大井教授が強調するのは、*press* と *America* が *and* で結ばれており、決して *press in America* ではないという点である。それは、方法論的にもアメリカ社会の実相とも関連している。アメリカ社会の無数にある新聞の歴史を網羅的に検証することはほぼ不可能であり、むしろこの多層的で多元的なジャーナリズムのダイナミズムこそが、歴史研究の対象となる。しかし、それは最大公約数的

---

\*さこう しんすけ 日本大学法学部新聞学科 教授

な歴史を抽出することでも、政治史に還元するジャーナリズム史でもない。

大井教授はこの点について、いくつか例示して話されることがある。ひとつは、トクビルである。トクビルがアメリカの民主主義を議論するなかで、ヨーロッパと比較して半ば感嘆して指摘していたのは、アメリカではなぜこんなにも多くの人びとが新聞の読んでいるのかという光景であった。つまり、新聞は生活にきわめて近いところにあり、生活の一部であった。その伝統は変わらずに、現在でも減少傾向にあるとはいえ、およそ1400の日刊紙、5000を超える週刊紙が発行されている。

そしてもうひとつは、アメリカのジャーナリズム教育・カリキュラムでは、ジャーナリズムのヒストリーと理論・原理がセットになって講座が設置される伝統がある。ジャーナリズム史とジャーナリズム理論とは一体となって、ジャーナリズムについての知的かつ言説が構成されている。

大井教授の研究は、このようにジャーナリズム史＝ジャーナリズム理論を基軸としているがゆえに、その射程は現在論としても広範に及んでいる。国際的なジャーナリズム／ジャーナリスト調査プロジェクト（WJS:Worlds of Journalism Study）、ジャーナリズム教育（WJEC:World Journalism Education Council）、映像を中心としたアーカイブ研究、震災・原発事故の報道とリスク研究など、これまで精力的に研究を牽引されてきた。

しかしながら、大井教授はこうした自らの研究の軌跡を権威のピラミッドとするのではなく、リベラルな議論の知的テーブルを作ることを重視する。そんな議論のなかで、「19世紀は、パークやポー、トウエインに代表されるように、研究者や作家とジャーナリストが明確に区別されていなかった」と話されることがある。ジャーナリズムの視線そのものが有しているリベラルな可能性を例示してしつつも、研究者としてのエートス、あるいはハビトゥスという身体性の次元について射貫かれる。

ジャーナリズム教育（大井教授は、ジャーナリズム教育とジャーナリスト教育を峻別する）が、依然としてドメスティックな傾向にある日本の環境のなかで、大井教授は、研究もそれに同調してナショナルな空間に内向きになるのではなく、グローバルな関係を構築していくことの必要性を常に問題提起されてきた。先に述べたWJSやWJECが端的なプロジェクトであるが、こうした研究と問題提起は、これまで10年間歩んできた新聞学研究所の研究の基礎となっていることにとどまらず、日本のジャーナリズム研究の環境と土壌を変える仕事であったことは、人びとの知るとおりである。

ジャーナリズム史研究が同時にジャーナリズム理論研究であること、ジャーナリズム史研究が同時に社会研究であることの可能性、今回の特集は、その研究の可能性を展望するための新たな一歩として組まれたものである。